

松本十郎には膨大な書き物があって『空語集』と名付けているという。私はその一部を読む機会があった。「『孟子』白文の末に書す」と題するものでその冒頭に、

「余、年十七、初めて致道館に学び、遠藤厚夫先生の会読につき「孟子」を聴く。年二十四、先大人に従って蝦夷に渡る。蝦夷は僻遠の地であり、多くの書籍を持っていくことができなかつたので、ただこの白文の『孟子』だけを持参し、居ること三年、専ら之を研究す。而して瓜期（任期）に帰るや又之を携えて再び致道館に入り学ぶこと二年、故あって館を出で家居し酒井玄蕃に学ぶ。慶応三年の春、君命を奉じて江戸に赴くも亦之を携え、その明年則ち明治元年革命の戦い起こり海内鼎沸す。余、国君の駕に従い荘内に還るも亦た之を携え、その年、余、再び国君の駕に従い東京に赴くも亦た竊かに袖中に挟んで之を携え一」

とあって、その後、松本は退官し東奔西走の後、帰郷し帰農しても余暇にはかならず『孟子』を紐解くという生活で、死にいたるまで『孟子』を手放すことはなかつたという。これによれば彼と『孟子』とはまさに一身同体だったようにおもわれる。松本がこの『孟子』をどう学びどう実践したかは彼の「空語集」にしるされていることであろうが、私はまだ一部しか見ていない。

孟子は孔子の歿後、異説が横行して孔子の思想が忘れられていくことを憂えて、孔子の思想を継承し、積極的に諸侯を遊説した。『孟子』は孟子の著述で、その一貫した思想は「性善説」として知られているが、その究極の具体的な実践は「人ハ皆、堯舜タルベシ」の一語につきる。

人はダレデモ堯舜のような聖人になることができるというのであるが、当時の諸侯識者は、聖人といえは盲目的にあるいは功利的にその言辭を信じ、大衆に大きな感化を与えた表面的にあらわれた事績の故に捧げられた賛辞という感覚であった。これは孔子の本意ではなかつた。聖人とは真に自己の本性に率がって已むに已まれぬ必然の道徳的要求に従った人のことであつた。孟子はこの趣旨のゆえに「人ハ皆堯舜タルベシ」といったのである。

この語は孟子遊説の途上、ある国の王さまの弟、曹交が孟子に質問した時の答えである。曹交が「先生は、人はだれでもみな聖人になれると知っているが、そんなことができるとは思えない。私は聖人といって崇められる堯や舜のような身長もないし、体重もないし、なんの取り柄もない」。

そういうと孟子は「そんなことは、聖人とはなんの関係もない。堯や舜は

誠心から孝悌を実行したから聖人といわれるのだ」とこたえている（『孟子』告子下）。

『孟子』の「人ハ皆、堯舜タルベシ」という重い命題を、孟子はどう考えていたのかを探るのが今日の話題であるが、「伊藤孝継の南洲翁遺訓」をも参考にするためにあえてその抄訳を配布した。

「伊藤孝継の南洲翁遺訓」は、西郷がいわゆる征韓論事件で下野した翌年の明治八年十二月、なぜか急遽鹿児島行きを命じられた伊藤が、西郷と鹿児島で単独会見したときの記録で、『孟子』の趣旨とまったく軌を一にする。

まず「人ハ皆堯舜タルベシ」とは、人はだれでも皆、堯舜のような聖人でなければならないというのであるが、この堯と舜という人物はシナでは伝統的に聖人と称された上古のなかば神話めいた王さまであるが、シナの学者は部落連合の指導者であったろうという。日本でいえば市町村長、いわゆる組長、あるいは知事のような立場であったかも知れないが、その勢力範囲は、黄河が大きく湾曲した流域のあたりと考えられているようである。

中国古典『史記』によると、堯の治世は「仁徳は天のように万物にゆきわたり、その知は神のように微妙で、人々はひまわりが陽光をしたうように、また百穀が雨雲を望むようにその徳になついた」とあり、民衆は王権の存在さえも自覚しないような完全な人格的統治者であったという。堯もまた同じであった。

「聖人と我とは類を同じくする者なり」（『孟子』告子上）というように、聖人も庶民も本性を同じくするただの人であって、堯舜といえども特別の生まれつきの人ではないというのである。

『孟子』はまた「堯舜の道は孝悌のみ」（告子下）とあって、堯も舜も聖人たりえた本質は、孝悌の実践にあったというのである。西郷は「孝悌」を「孝悌忠信」と四字にしているが、同じことである。孝は親子の相互関係、悌は年長者と年少者の相互関係、忠は上司と部下の相互関係、信は広く人々との信頼関係ではあるが、それらの実践にあたっては、自己のいかなる功利的感情も欲望もまじえることなく、純粋な自己の本性から発する孝悌忠信を発揮することなのである。

孝悌忠信は家庭や社会や会社組織などのルール道徳にとどまらず、あらゆる人事や事業の基底をなすものであって、部落連合の長としての堯舜はこれら国政のすべてに自ら任じたのではなく、適材を適所に配置し委任して業績を発展させたのであった。

孝悌忠信は、その人その人の今に、その時に、その居場所において、親で

あつたり子であつたり、組長であつたり社長だつたり社員だつたり、あるいは大臣であつたりという位置において、いわゆる時所位において、私欲なく孝悌忠信を過不足なく適切に実践すれば、すでに聖人なのである。

「堯舜の道は孝悌なり」といいまた『孟子』は「万物皆我に備わる」（尽心上）ともいい道德心は天与のものだとしている。

人は生まれながらにして孝悌忠信というDNA的直感的道德力を具えているのだから、それを發揮さえすれば、だれでも聖人になれる、というのが孟子の主張なのである。

そこで「伊藤の南洲翁遺訓」を意識しながら解説することにする。

「古の聖人の教えである道德は、聖人が作ったものではなく、天地自然の絶対至高の真理である。天はこれをすべての人の心に与えており、与えられている以上、この道德を行動に移すことができないようでは、禽や獣と同じではないか」

南洲は「道德は聖人が作ったものではなく天地自然の真理だ」といい、あとで道とは孝悌忠信のことだというのであるが、致道館で徂徠学を学んだ伊藤の「道」の観念は、堯舜などの聖人が製作した「礼楽政刑」、すなわち政治的社会制度だとしていたのである。だから西郷は最初に「道」の定義をいったのであろう。伊藤が質問したのかもしれない。

ちなみに致道館の創設当時の徂徠学では、『孟子』は禁書であったが、初代の祭酒が失脚したあとは、生徒の要望があれば、教員合議のうえに許可することになっていた。松本が学んだころは致道館の末期でもあり、松本を教えた遠藤厚夫は朱子学者でもあったから、遠藤は生徒をあいてに『孟子』を会読していたのであろう。

人がみな道德的本性を与えられている以上、それを發揮することできないようでは禽獣にひとしい、と伊藤を激励しているのである。

余談ではあるが、明治八年という次代は征韓論に揺れ動いた当時で、西郷が大久保政府に代わる第二維新を意図していた時であった。そのときこそ荘内はこぞって西郷に馳せ参ずる。そのとき伊藤は一隊を率いる部将であり、維新成功の暁には西郷政権の一翼をになうべき人材でもあった。以下に続く西郷の教訓に激しい気魄が感じられるのは、そのせいであろう。

「天が与えたこの道德をわが身に具現することがすなわち聖人なのであって聖人は特別の生まれつきの人でもなく、神や仏のような人でもなくわれわれ

と同じ人間なのである」

聖人の本質は精神性、道徳性にあるというこの思想は、ひとり孟子や西郷の説くところではなく、新儒教を代表する朱子以来の学者の唱えるところでもあった。

「天がわれわれに与えた真理である道徳とは孝悌忠信であって、親義別序信であるといっても同じことで、日頃われわれが体験している対人関係のことである」

これもすでにふれたことであるが、親義別序信とは、親は親子の相互関係、義は上司と部下の相互関係、別は夫婦の相互関係、信は互いの信頼関係のことで、孝悌忠信と同義である。西郷のかかげるモットーに「敬天愛人」があるが、この愛人とは孝悌忠信を拡充したもののことであろう。「敬天」の「天」とは絶対至高の道徳的秩序を具現する天であり、その道徳がわが身にある以上、天はわが心なのである。我が身の心、わが身を敬え、慎めというのである。

その道徳は日々自分が実践しているもので、自分の一生は孝悌忠信以外にはないのである。

「この対人関係を時所位に応じて、過不足なく適切に行動に移すことができるようにするのが学問、いわゆる実学活学というもので、読み書きや字句を知識として覚えることが学問ではない」

時所位についてはすでにふれた。

「学問を活学実学にまでたかめ、日頃の対人関係において、どんな場合においても、天与の真理である孝悌忠信が過不足なく適切に実行できる、そういう人を聖人というのであるが、人はみな聖人になろうという真剣な志をもたなければならない。こうした真剣な心の状態を誠というのである」

「真剣な心の状態を誠という」と西郷はいつているが、この誠は、われわれが日ごろ安易に「まことに」何々とかついている誠ではなく、西郷はべつに「真誠」ということばであらわしているその誠である。

『孟子』に「人の学ばずして能くする所のものはその良能なり。慮らずして知る所のものはその良知なり」（尽心上）とあるが、これはあらゆる人の心の活動を統一する先天的に与えられた知的能力であって、これを単に「良知」とよぶ。この良知が真誠であり、ここでは単に誠というのである。

この誠、良知とは何か。

「誠とは親子関係の孝、兄弟姉妹関係の悌、上司と部下、あるいは自分と

会社の関係では忠、友人または多くの人々にたいしての信、それらの対象に対して、ただわれを忘れて相手を善かれと願うだけで、私心私欲が微塵もなとときの心の姿、それを誠というのである。この誠になることは聖人になることでもある」

たとえば、孝を行う場合、孝の形にはきまった形というものがない。子である自分にも親にもいわゆる時所位があつて、双方の状況の変化によって、孝の実行の形が変化するのが当然なのである。そのときどきの孝の表わし方をいかにすべきか、そのときもっとも適切な孝のあり方を判断するのが誠、良知なのである。ただし西郷がいうように、そのとき私心私欲があると、誠、良知がそれに覆われて発揮できなくなる、つまり誠、良知がかくれて、私心私欲という功利的感情、欲望に支配され、孝の行為が不適切なものにならざるをえない。

万事の処理においてもまた然りなのである。良知はよく万事の是非善悪を判断し、向かうべき方向を適切にしめしてくれるのである。

『論語』に「顔淵、仁を問う。孔子いわく。克己復礼仁を成す」(顔淵)とあるが、先人はこの一語を『論語』を活学する究極としている。「克己」とは功利的私欲からの脱却であり、「復礼」とは克己のあとにあらわれる道徳的行為であり、すなわち仁である。

「聖人になることなど、自分にはとてもできないとって努力を放棄する者は、戦陣で敵を前にして逃亡する卑怯者と同じである」

激しい教えであるが、これは西郷自身の現在進行中の修行努力の表出でもあり、荘内藩士への期待でもあったであろう。

「聖人たらんとする志は、青年期壮年期までは強固でも、戒めなければならぬのは晩年期である。人物を鑑定するのはこの晩年期の心境か行動を見るのが一番いい」

晩年は社会的活動をはなれて悠々自適できるころのことであろうか、そのころにいたって、なお功名富貴「死に欲」などに心を乱すことはしたくないものであるが、西郷は「見孫のために美田を買わず」といい、また佐藤一斎の『言志録』、「俗事かえって是れ実なり。是れを俗といい忽がせにすること勿れ」を抄出している。日頃の雑事を処理するにあたって、私欲のない誠、良知の判断をもとめようとするところこそ、誠、良知を拡充する功夫なのである。王陽明は「致知格物」といい、良知にきいて正しく行うことを聖人への功夫とした。

「程明道がこういつている。志が固いかどうかを、夜にみる夢でも占うことができる。昼に聖人たらんと固く志しても、夜、つまらぬ夢をみるようでは志が定まっていけない証拠だと」

「誠一枚になって孝悌忠信の真理を実行するには学問をするしかない。学問は古典を読むだけではない。朝夕親子に事え友人にまじわり会社に勤務するにも、その有様が誠心からでているかどうかを厳しく反省することである」

西郷は実践をおもんじたのである。

『孟子』の思想をうけついで学者に

朱子、王陽明などがいる。両者ともに、聖人たらんとすることを究極の目的としたが、朱子は書斎派とでも呼ぶべきか、万卷の読書の上になお厳格な修行をつむことによって聖人たりうるとして、みずからそれにむけて励んだ。一方の陽明は知と行は合一であるべきとして、実践をおもんじた。ただしこの「知行合一」の知は一般的知ではなく、良知の知であり、天与の良知は、良知の判断による現実問題の実践によって、質量ともに拡充されるとしたのである。朱子の学問は読書の時間と費用をふだんにもつことができる王侯貴族たちのものとなりやすかったのに対して、陽明の学問は人は誰でも聖人になりえたのであった。

西郷も陽明的である。だから日々の行動の「有様が誠心（良知）からでているかどうかを厳しく反省せよ」と強調するのである。それが聖人への道だからなのである。

「誠は私欲をなくすことでえられるが、他人から誹られれば怒り、誉められれば喜ぶようでは、自分を愛する私心があるからおきるもので、誠心一枚になれば、自分一身の毀誉に心を動かすことなどないものである。しかし国家の受けた辱めにたいしては別だ。決して黙ってはいならないものだ」

「誠一枚」とは純粹でひとかけらの私心もない誠、すなわち良知のことである。この時期、下野したばかりの西郷には、喧々諤々の毀誉褒貶非難中傷があったはずである。それに堪える功夫をしていたのかもしれない。ただ「国家の受けた辱め云々」は韓国事件のことであろうか、伊藤にはもっと具体的は話があったのかもしれない。これはここで詮索することではない。

「聖人たらんとする志をたてた以上は、鶏が卵を抱き、猫が鼠を狙う様に似て、他人がいう毀誉などにまどわされることなく、ただひたすら卵を

抱き、鼠を狙う、そういう一筋な心境を誠一枚というのである」

「誠一枚」とは私欲のまったくない誠、良知のことである。鶏や猫の本能的欲求にも似た誠、良知の拡充が聖人たらんとする功夫なのである。この例話は『孟子』によくでてくる。

「聖人たらんとする志がたっていれば、いかなる艱難にあたってても正当な判断も処もできるし、志がたっていなければ、すべては私欲にまどわされて、正しい判断も行動もできないものである」

良知を乱す私欲に克つ克己とは、否定してはならない人間存在の欲望、快樂や幸福を否定しようとする堪え難いものではなく、じつは最もよく自己最深の本性である誠、良知に目覚めて自己を実現する功夫なのである。道徳的生活はもっとも自然であり、緩やかなものなのである。

「三達徳として尊ばれる知仁勇も、要するに至誠の行動にほかならない」

三達徳とは『中庸』に「知、仁、勇の三つは天下の達徳なり。これを行う所以のものは一なり」とあるが、良知のはたらきによって仁の道徳を明らかにし勇気をもってこれを実践することは、古今を通じる人間の重大な道徳であるが、その行為は「一」誠によって完成される。誠なくして知も仁も勇も発揮されることがないというのである。

ここでいう仁は前出の孝悌忠信、西郷のモットーだった敬天愛人の愛人などをふくむもので、『孟子』にも頻出する語である。

たとえば、「仁者に敵なし」（梁恵王上）、「力を以って仁を仮る者は覇なり」（公孫丑上）、「徳を以って仁を行う者は王たり」（々）、「有名な「惻隱の心は仁の端なり」（々）だれにでもある思いやりの心が仁への入口だというのである。「仁は天の尊爵なり。人の安宅なり」（々）仁は天が人に与えた尊い爵位であり、居住区としてはもっとも安らぐところだという。「道は二つ、仁と不仁とのみ」（離婁上）これは孔子の思想の根底でもある。「人を愛して親まざればその仁に反れ」（同）人を愛しても人が自分に親しんでこないのは自分の仁愛がたりないからだ。「仁は人の心なり、義は人の道なり」（告子上）、「仁言は仁声の人に入ることの深きに如かず」（尽心上）口さきの仁道論は、実践した仁の感化力には及ばない。などなど。これらはみな松本の胸中深く沈殿されていたことがらであろう。北海道判官として土人にたいする惻隱の心、仁愛には『孟子』の心が活かされていたのではないかと思われる。

松本の『空語集』に「蝦夷の葛衣を三浦竹二郎君に贈るの序」という書付

がある。明治二年九月、松本が北海道開拓判官という職を「聖天子の命を奉じて北海道に」赴くにあたって、黒田清隆と問答し、やがて判官を辞任するにいたるいきさつを記述したものであるが、今その要旨を紹介するにとどめる。

北海道開拓の成功は長い年月を要することであるから、役人と原住民との信頼関係がたいせつだという黒田の戒めを肺肝に銘じて、松本は寢食の間もわすれず、自ら原住民の衣服をまとい、使用人と同じ食事を食らい、漁夫土人といえども礼讓を失わず、約束は必ず護り、葛衣判官という嘲りをうけても意としなかった。

明治八年、樺太交換のとき土人の移住地について黒田と意見を異にした。松本は日本とロシアの約定によって、土人はその希望する地に移住させることになっており、漁業を衣食の糧としてきた土人は北見の海浜に移りたいというその希望をうけいれたいと、東京の黒田に許可をもとめた。黒田の命はこれに反して、土人の移住は自分の権限だといひ、八百数十人の土人を石狩川の上流の炭鉱に移し採炭に従事させよというものであった。当時この炭鉱に従事している者は大抵囚人であった。そこで松本は、黒田に宛てて「無辜の土人を罪人といっしょに採炭にあたらせることは、人情として実に忍びない、いわんや土人は祖先以来世々海産によって衣食してきたもので、いまにわかには山間に移し、慣れない仕事に従事させることは、どうしてこの地に安住することができようか。酋長某はこれを憂慮して血を吐いて死んだ。哀れむべきの極みである」と再考をもとめたがいれられなかった。松本は最後にこう書きしるしている。

「自分ひとりが信義を失うことは我慢できても、土人が安住の場所を失うのは開拓判官という職を汚すものである。この職は聖天子の命によるもので、いやしくもその職を汚すことになれば一日としてその職におるべきではない。たとえ黒田氏は予の恩人だといっても断然札幌を桂冠し、葛衣を着て故山に還ろう。明治九年丙子九月なり」と。